

“まもる峠の緑の道を、鳥たちのすみかを、
みんなの尾瀬を、人間にとって、
ほんとうに大切なものを 平野長靖 “

平野長靖は長英の長男として群馬県片品村に生まれた。昭和29年に京都大学に進む。卒業後に北海道新聞社に入社し同僚の紀子と結婚した。数年後、長蔵小屋の跡継ぎと思われていた次男が急逝、やむなく家業の長蔵小屋主となった。

昭和20年代から計画が進められてきた群馬県大清水から三平峠を經由し、福島県の沼山峠に通じる観光道路が、昭和41年ごろから着工された。その道路は尾瀬沼付近を通る予定で、周辺の湿原や原生林の自然環境に、深刻な影響を及ぼすことが危惧された。46年には三平峠のすぐ下まで工事が伸びてきたため、岩清水が涸れる現象がおこる。デリケートな生態系が破壊され、日本が誇る美しい尾瀬が亡ぶことに危機感を抱いた彼は、志と同じくする人々と道路建設反対運動に立ち上がった。

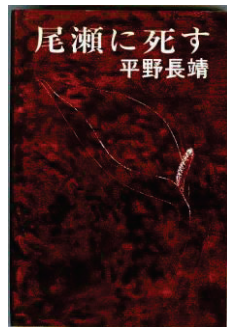
彼は単身で上京し環境庁長官、大石武一氏の自宅を訪ね、尾瀬の自然を守る必要性を直訴した。彼の誠実な人柄と、その熱意に動かされた大石長官は直ちに現地の実態調査を約束した。尾瀬を視察した長官の英断により工事の中止が決定され、環境庁の地元への説得により工事が確実に中止された。こうして尾瀬の自然破壊は防がれた。

連日の会合出席や反対の署名活動、講演会など、そのため奥深い長蔵小屋と下界との往復。それによって彼の疲労は極限に達していたと思われる。昭和46年12月1日、小屋の越冬準備を終えて山を下りる途中、雪の三平峠で力尽きて帰らぬ人となった。享年36才。

“ 尾瀬のもつそのやさしさは、どこから生まれてくるのでしょうか。
水々しい湿原や、山をおおう樹々からの「気」の力でしょうか。
それとも、雪どけと共に咲き出す高山植物の花の群れ、
梢から天に向かって声いっぱい、さえずる鳥たちの生命からでしょうか。
何故に尾瀬はこんなに美しく、そして私たちに生きる力を与えてくれるのでしょうか。
原始太古の悠久の流れから、幾千年経てもなお、尾瀬の生命は息づき、生きています
一步一步、一息一息、歩くことにより、私たちの心の中に、わが内なる尾瀬が芽生え
魂は自然にやすらいでゆくのかも知れません。一日として、同じ姿をみせない自然。
それは刻々と変化し、私たちにいつも新鮮な、驚異と神秘と感動を与えてくれるのです。
この美しき尾瀬が永遠に残され、次代の人々に受け継がれることを、
心からねがっています。 尾瀬長蔵小屋 平野紀子 “



尾瀬のニッコウキスゲ



「尾瀬に死す」
平野長靖 著作集



長蔵小屋